

## 2016年度 中央大学特定課題研究費 ー研究報告書ー

所属	文学部	身分	教授
氏名	野宮大志郎		
NAME	Daishiro NOMIYA		

## 1. 研究課題

(和文) 被曝の記憶の継承：社会運動としての「伝承」

(英文) Surviving the atomic bomb: Narrating personal experiences into a social memory

## 2. 研究期間

2年間(2015年度-2017年度)

## 3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600字程度、英文 50word程度）

(和文)

本プロジェクトでは、「被曝体験の伝承」を社会的集合行為と捉え、その行為の成立と継続の条件を探り、あわせてその集合行為性が被曝体験にどのような性質を与えたかを探ることを目的とする。被曝体験を語り伝えることは、個人的な経験を語ることである。しかし、それが伝承運動となり、ついには行政によって「事業化」されるに至る。この制度化過程がなぜ起こったのか、また制度化によって被曝体験や被曝者にどのような新たな意味が付与されたかについては、今までほぼ論じられることがなかった。

調査は、本務校近辺にての資料収集（中央大学図書館や国立国会図書館にて蔵書資料のコピーと重要書籍資料の購入）、現地にて複数回にわたっての資料・データ収集（広島、長崎で、平和資料館、平和祈念館、公文書館、文化センターでの資料収集、伝承事業の見学、「証言者（＝直接の被曝体験者）」、「伝承者（＝直接の被曝体験はないが伝承する人）」に対するインタビュー）によって構成された。また調査データは、研究ノートにまとめられた。

研究の結果、個人的な被曝体験が伝承として社会的制度化される基礎として、体験の集合性と未来に向けての「語り伝え」に対する強い意志が存在したことがわかった。また、この行為を伝承事業として制度化した結果、被曝者そのものに対して「聖」性が付与されたと理解することができる。

(英文)

For atomic bomb survivors in Hiroshima and Nagasaki, narrating the experience of the atomic bombs was a very personal endeavor. Some decades later, narrating the survival experiences gradually became a collective effort; in fact it has become institutionalized as a narration project laid out by the local governments. How then did this institutionalization take place? And what effects has this change brought to the survivors?

Investigations were performed during the fiscal year 2016 and 2017. It was concluded that (1) the institutionalization was based on the collectiveness of the surviving experiences and a strong collective will to perform narrations into the future, and (2) the institutionalization of the narrating project resulted in the symbolification of the survivors.